

海の生物種多様性は共生がカギ？

ノミも積もればご馳走になる!?

クラゲに付着するクラゲノミの仲間

取材協力：

Dhugal J Lindsay (ドゥーグル・J・リンズィー)

極限環境生物圏研究センター
海洋生態・環境研究プログラム
海洋生態系変動研究グループ

このページの写真をとくにご覧あれ。出来そこないのクラゲのようにも見え、樽を伏せたような上半分はサルバというプランクトン。その体をすっかり占領し、下からニョキリとハサミを出している生き物がタルマワシだ。体長約4cm程度の甲殻類、クラゲノミの仲間である。タルマワシはヒカリボヤやサルバの体をくり抜いて自分が入る“樽”を作りその中に卵を産んで子どもを育てる変わり者。くるくる樽を回し浮遊する姿からこの名がついた。時々、サルバから出たハサミをクラゲに引っ掛け、クラゲの体をちぎって子どもの餌にする。右頁上の写真はオオトガリズキンウミノミというクラゲノミ。丸い固まりはクシクラゲの体で、クラゲノミは右下の方に透けて見えるエビのような姿だ。

クラゲノミはクラゲやサルバといったゼリー状のプランクトンに付着して、おこぼれの餌をもらったり、胃の内容物をもらったり、クラゲ自身を食べたりして暮らしていると考えられている。子どもの頃だけクラゲに付着し、成長すると勝手に自由生活を行う者もいるらしい。そしてこの小さな生き物は、海の物質循環にも、生物種多様性の維

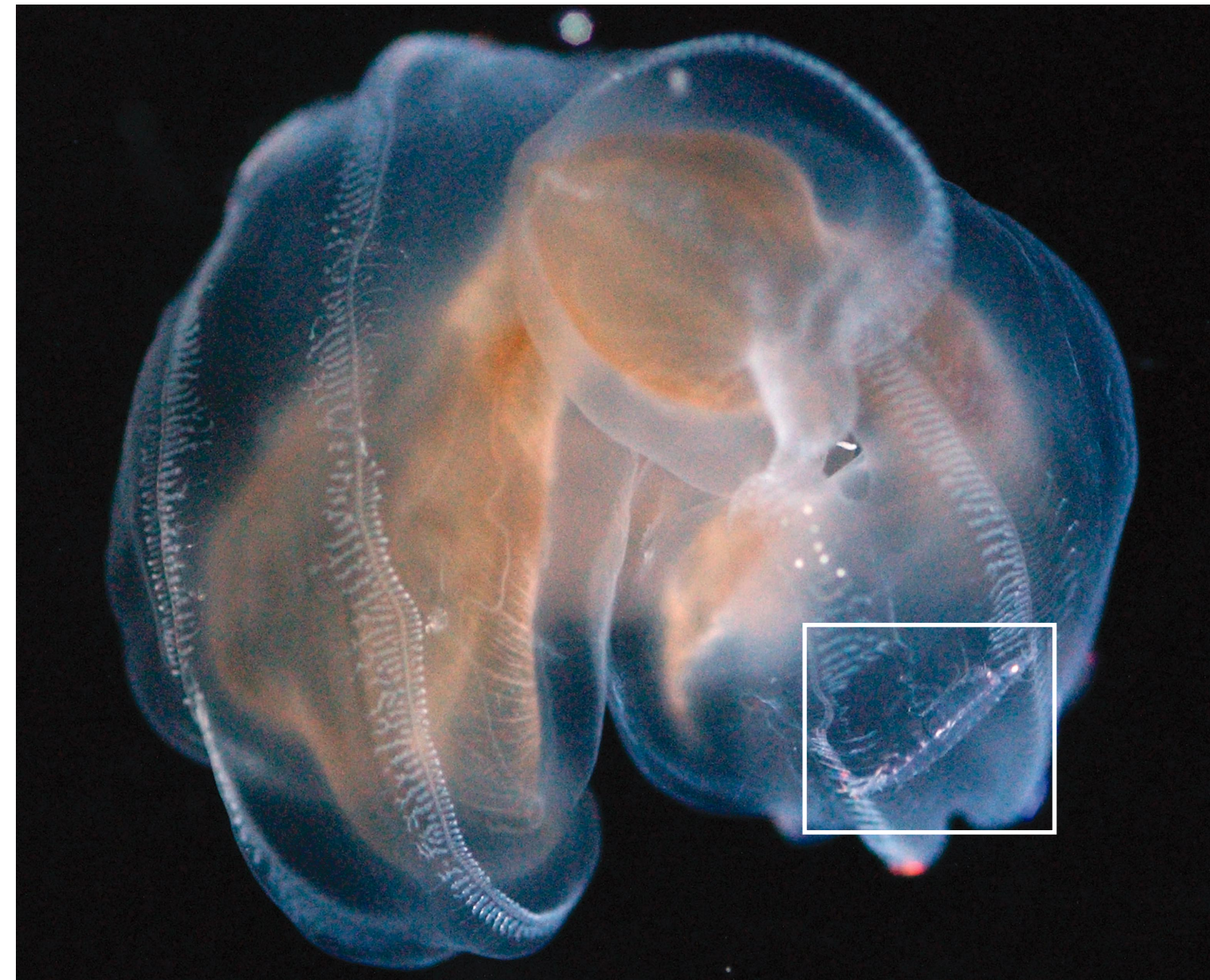
持にも重要な役割を果たしているらしい。個性豊かな姿形は、クラゲとの関係や生態に応じてさまざまに特化しており、熱帯雨林の樹と昆虫の関係と同じように、お互いの多様性を高めあっている可能性が示唆されている。また、

クラゲノミは水っぽいクラゲを食べて、タンパク質たっぷりの魚たちのご馳走に成長する。

クラゲノミはその体の大きさに似合わず、なかなかどうしてあなどれない奴らなのだ。



サルバの体を占領したオオタルマワシ *Phronima sedentaria*



チョウクラゲ *Ocyropsis maculata immaculata* (クシクラゲの一種) に付着するオオトガリズキンウミノミ *Oxycephalus clausi*。写真の白い囲みの中にうっすらとエビの様な姿が見える。(駿河湾で撮影)



〈左から〉カボチャフクレノミ (仮称) *Mimoneustes* sp. (undescribed)、タマテング *Platyscelus ovoides*、ノコギリウミノミの一種 *Scina* sp. いずれもクラゲノミ亜門に属するが、その形はかなり違う。